

〈書評論文〉

西洋社会の鏡

Lufti Sunar,
*Marx and Weber on Oriental Societies:
In the Shadow of Western Modernity*
(Ashgate Publishing Limited, 2014)

吉 琛 佳

1 はじめに

西洋社会が前近代から近代へと転換するプロセスに関する原理は、K. マルクス、M. ウェーバー等の古典的社会学者によって究明され、近代社会学理論の根本原理になっている。しかし、西洋社会の特徴に対する把握は単にその内部での観察によっては決してできず、必ず「鏡」の役を演じる対象物の存在が必要である。マルクス、ウェーバーを含む社会学者は、近代市民社会をヨーロッパ伝統社会と対照するほか、前者を広大な非西洋社会——インド、中国、イスラム世界からエジプトまでの、彼らの意味での「オリエン特」社会と比較したうえで、西洋の近代化および資本主義社会の実質を究明しようとした。したがって、これら「近代とは何か」を定義した理論家たち、とくにマルクスとウェーバーはともに、オリエン特社会に関する研究を行った。

本書の著者 L. スナーはイスタンブール大学社会学部の助教授であり、古典社会学理論やオリエンタリズム、近代化などをめぐって研究を展開した。著書は本作のほか、『ムスリム世界の文明に関する論争』(*Debates on Civilization in the Muslim World: Critical Perspectives on Islam and Modernity*, 2017) などがある。スナーからみると、これらの古典的理論家にとって東洋社会が西洋近代化の影として存在するものであること、そして、オリエン特が彼らの理論にとって西洋社会を照らし出す鏡のための存在であること、以上

二点を踏まえなければ彼らの東洋社会論を正しく理解・評価することは不可能である。

本書はまさにこうした認識に基づくマルクスとウェーバーの東洋社会論に対する批判的な再検討である。ヨーロッパで行われた非西洋社会研究の問題性に対する反省的研究はすでに長い歴史を持つ。早くも1970年代半ばに、アメリカの社会学者B. ターナーはすでにマルクスとウェーバーそれぞれのイスラム研究に対する批判を行い、彼らはどちらもヨーロッパのオリエンタリズムの伝統における東洋に対する偏見を受け継いだと指摘した(turner 1974, 1978)。その後この問題は、E. サイドの『オリエンタリズム』が出版されて以降、より熱烈な議論を招いた。この文脈に属する本書の独特性は、比較的簡潔に、特に重要な二人の古典理論家を並行して分析したところである。

この二人の思想家の社会学における関係を明確にするため、著者は第一章で社会科学研究における二人の理論のつながりをめぐる検討をまとめた。彼が引用した膨大な論考からわかるように、この二人の理論は、それらが継承した学術的伝統、方法論、近代資本主義に対する認識ないしそれらが代表したイデオロギーなど様々な側面から見ても極めて異なる内容を持ち、長い間対立してきた近代社会を捉える二つのアプローチであるとさえ認められてきた。しかし著者は、こうした思想の差異にもかかわらず、彼らのオリエント社会に対する研究には多くの側面において驚くほど一致があることを指摘した。著者によると、ウェーバーとマルクスの間にこのような一致がみられるのは、二人とも当時のヨーロッパのオリエンタリズムの伝統に対して無反省であるだけでなく、彼らは同じく近代化の道を歩き出した西洋社会に関する解釈案を提供するため、オリエントを参照物とみなし、「停滞」「後進」のレッテルを貼ったからである。

本書は三部構成である。第一部と第二部はそれぞれ、マルクスとウェーバーの学術的背景、東洋社会研究の依拠した文献資料およびその研究の結論に対する批判的な再構成である。第三部では結論が述べられ、両者の東洋社会に対する認識の共通性がまとめられている。本文では論の展開に従って、著者の主なる結論を整理したうえ、それに対する補足と議論を行う。

2 マルクス——「アジア的生産様式」と「白人の重荷」

マルクスの東洋社会論は特に彼の「アジア的生産様式」論によって知られるので、本書における考察もこの概念をめぐって展開されている。マルクスは彼の唯物史観に基づく解釈モデルで、西洋社会の歴史を原始共産制から、奴隷制、封建制、そして資本主義に至る歴史発展段階論によって理解した。しかし彼によると、東洋社会はこうした能動的な発展

能力を持たず、その歴史において独裁政権と国家所有制によって特徴づけられるアジア的生産様式が一貫して存在している。マルクスによると、東洋社会のこうした停滞状態は、次のような要因によるものとされた。すなわち1) 裁政権による土地の国家所有制による不自由な生産関係が階級闘争の展開を妨げている、2) 農村の自治的な生産関係が主なる経済様式であり、生産分業および自由市場での貿易が発展しにくい、3) 水利システムに代表されるような大規模な建設は個人が国家の下でコントロールされることを促した。

著者は分析に入る前に、この「アジア的生産様式」論の西洋およびソ連における曲折した受容史を解説した。日本と中国での同類な議論と同じく、欧米とソ連の学者の議論もそれぞれの政治的状況およびイデオロギーに制約されることを免れない。特にスターリンが政権を握ったソ連で、彼の学説に反対した学者たちが粛清された。のちにアメリカに帰化したドイツの中国学者 K. ウィットフォーゲルの事例もこの厄介な問題を議論する時の危険性を示した。その物議を醸す著作『東洋的専制主義』で、ウィットフォーゲルは地理環境及び水利工事に対する需要が東洋社会の全体主義の形成において重要な役割を果たしたことを強調した。彼の結論はリベラルな学者たちのソ連に対する批判と似たような形を取ったが、その東洋社会に対する分析は直接的にマルクスの結論を引き継いだ。ソ連の研究者たちは後にウィットフォーゲルの学説を罵倒あるいはタブー視したが、著者からみると彼が西洋中心主義の立場を取ったことはマルクスに由来する。ソ連の研究者たちはマルクスを非難することができなかつたため、ウィットフォーゲルが実質的にマルクスの「贖罪のヤギ」の役割を演じたと著者は指摘した (pp.25-6)。

著者は本書で、マルクス自身の思想における進歩主義と彼の植民政策への態度との関連性を指摘した。前述したように、東洋社会の停滞性に対して決定論的な認識を持つマルクスは、あるイギリスのインドでの植民を論じる文章で、以下のように述べた。つまり植民地侵略は言うまでもなく残酷なプロセスだが、こうしたプロセスがなければ、永遠に続く愚昧と停滞からインド人を救うことが不可能だ、と (p.57)。この認識は明らかに「白人の重荷」(非白人を文明開化へ導くことが白人の責任であるという言い訳による植民地支配に対する正当化) に代表される植民地主義のイデオロギーと一致する。

この批判に対して、今までマルキシスト側から2種類の反論がなされている。その一つは、こうした極端的な進歩主義はマルクス自身の思想ではなく、F. エンゲルスおよびのちのマルクス主義者によって形づくられたものだという説である。そしてもう一つの説は、マルクスは1870年以降、文化人類学の新しい研究成果を取り入れ、ヨーロッパを文明の頂点とみなす進歩主義的な考えを基本的に克服したということだ。

こうした解釈が正しいかどうかを検証するため、著者は第四章で、マルクスのオリエン

ト研究の参考文献を整理し、彼がオリエント世界に対して抱いている印象の由来を明らかにした。著者によると、マルクスの歴史発展段階論は明らかに啓蒙思想の影響を受けたものである。そして彼のオリエント社会に対する断片的な認識は、当時のオリエンタリズムから由来した。彼の資本主義に関する論述に見られる実証的・科学的な研究方法とは違い、マルクスのこれらの資料に対する利用の仕方は恣意的である。これはマルクスの植民地の後進性への信念を深め、また西洋による植民支配はある意味でこの後進状態から離脱するための一種の「必要悪」とさえ彼に思わせるものであった。しかし東洋の後進性は果たして本当に事実であったのだろうか。著者は前近代インドの経済状況に関する一連の研究を引用し、実際には植民地時代以前のインドの経済力はヨーロッパを超えていたことを示した。植民者たちに力を与えたのは経済的な実力ではなく、その軍事力であった。

著者は以上の分析を踏まえて、マルクスの東洋社会研究に対する批判を行っている。著者によると、マルクスの東洋研究における偏見は必ずしもそのすべてが当時のオリエンタリズムから由来するものではない。こうした文献資料を、マルクス自身が意図性を持って選択的に応用したことも彼の結論における誤りを促した。また著者の指摘によると、マルクスの東洋社会認識は彼の唯物史観に基づく生産力決定論からある程度背離している。すなわち、マルクスの東洋社会論では、東洋社会の生産力は政治、法律、文化などを含む社会形態全般を決定する要因ではない。それとは反対に、彼からみると、東洋社会の生産力の発展は、彼にとって「上部構造」であるはずの政治形態によって制約されたものになった (p.62)。マルクスの研究における「オリエント」は、広大な非西洋諸社会の多様性を抹消し、すべて「アジア的」という言葉で表現されただけでなく、それはただ西洋社会の発展・進歩の反面として使われたゆえ、歴史性を欠く永続的に停滞した後進的な形として現れる以外にはありえなかったのである。

3 ウェーバー——「近代」を救える合理性

ウェーバーの近代市民社会を究明することへの情熱はマルクスとはまったく違うところに由来する。ウェーバーの時代には、マルキシズムの資本主義批判は徐々に受けられつつあり、進歩主義的な考え方に対する反省、またニーチェ的なペシミズムがますます人々の心を捉えていく。S. ヒューズによると、ウェーバーは空虚化した実証主義の基礎を解体し、歴史的リアリズムの新しい道を切り開くことによって、啓蒙の伝統と進歩主義を生き返らせた (p.69)。著者はまた、ウェーバーの O. シュペングラーの「西洋の没落」論に対する批判、または二人の間の討論を脚注で回顧した。これらの論拠を踏まえて、ウェーバーの学問は

ニヒリズムへ進んだヨーロッパ文明を救いだし、近代化への自信を取り戻すことを目指していたと著者は指摘した (pp.155-6)。

著者によると、ウェーバーの東洋社会論に対して今までの研究ではそれほど議論されてこなかった。しかし例えば、インド、トルコの何人かの社会学者の中には、非西洋社会で資本主義の誕生は不可能であるというウェーバーの結論を批判した者もいる。

この問題に関して著者はまた、ウェーバーが参照した文献からそのオリент研究の問題性を再考した。著者の指摘した通り、ウェーバーの時代で、東洋学研究はすでに徐々に専門化していたため、中国語やサンスクリットを読めないウェーバーでも翻訳書を通して諸文化・宗教の古典を読むことができるようになっていた。しかし著者はマルクスの場合と似たように、ウェーバーも彼が引用した資料に対して徹底的な反省をしていなかったと指摘した。

著者によると、ウェーバーはマルクスの資本主義の理論に反対したが、彼らは東洋社会に対する研究、特にその水利による専制制度の形成、土地の公有制、物納税の影響等の点で、マルクスの理論とはきわめて近い認識を持つ。ウェーバーのマルクスとの違いは単に、前者は人間の生活態度を決める宗教思想から出発し、東西の社会の区別を分析したことである。またウェーバーはその中国社会研究で、中国の資本主義の発展は、王朝の専制政治による経済への制約のほか、合理的官僚制や予測可能な法律制度の欠如によって阻害されたと指摘した。ウェーバーは特に家父長制の伝統のもとで形成された中国の官僚制と西洋の合理的官僚制を区別し、それによって西洋の政治体制の独自性を強調した。彼の世界諸文明の都市、法律および芸術に対する比較研究においても、ウェーバーは非合理的な東洋社会と合理的な文化を發展させた西洋文化を比較し、それによって、彼の問題意識、すなわち「普遍的な意義と妥当性をもつような發展傾向をとる文化的諸現象はなぜ西洋でのみ生まれたのか」ということに対して答を出した。

ウェーバーのオリент社会に対する研究に対して、著者は主に三つの問題を指摘した (pp.158-60)。

1) 資料の不十分さ。ウェーバー自身の社会学研究の方法論は特に研究の客観性を重視し、資料に対する綿密な収集と分析を提唱した。著者からみるとこの原則は単に彼の西洋文明に対する研究でのみ守られた。東洋社会を論じるとき、ウェーバーはときどき自分が専門家ではないという言い訳によって自己弁護して、ごくわずかな資料を無反省的に利用し、それに基づいて軽率に結論を下してしまう。例えば著者によると、ウェーバーはイスラムの都市を分析した時、ただ一つの文献を検証せずに引用した。

2) 意図的な資料選択⁽¹⁾。ウェーバーはいろいろな理念型によって東洋社会に対する認識を形づくるが、これらの理念型は彼がすでに持つ認識モデルに基づいて形成されたものなので、果たして東洋社会を如実に伝えているかどうかは非常に疑わしいことであると著者は指摘した。著者によると、ウェーバーの目標は単に西洋と対立的な特徴を持つ東洋を作り出すことであるため、彼が選んだ東洋に関するデータはやや恣意的であり、またそれを成立可能にさせる文脈をきちんと理解・分析しなかった。

3) 超時代的一般化の傾向⁽²⁾。ウェーバーはドイツの歴史主義に深く影響されたが、彼のインド、中国に対する研究は往々にして一般論で行われたので、数百年隔った時代の事実を混ぜて論じる場合が多いだけでなく、そもそもアジア諸社会の時代転換に伴う変化に対して無関心な傾向がみられる。それは彼がマルクスと同様に、東洋社会が停滞していることを深く信じていたことから生じた問題である。

4 まとめ——マルクスとウェーバーの東洋社会論の一致

まとめると、マルクスとウェーバーの資本主義市民社会に対する理解は大きく異なるが、彼らの東洋社会に対する分析は多くの点で一致を示している。著者はその一致を以下の通り列挙した。

- 1) 研究目標が両者ともに東洋を鏡として使い、それと照らし合わせることによって西洋での近代社会の発展を解説することであったこと。
- 2) 西洋を発展的で、東洋を停滞的であるとみなすこと。
- 3) 東洋を地理的・環境的な概念で、西洋を時間的・歴史的な概念で理解すること。
- 4) 当時のオリエンタリズムは、彼らの東洋に対する理解の由来であったが、それは同時に、共通の誤りを促したのものであること。
- 5) 地理的、水利的な要素の専制主義への影響を強調したこと。
- 6) 西洋社会を研究するときの彼ら自身の方法論的原理からの乖離がみられること。

著者はこうした研究に基づき、のちに極めて異なる知的伝統を形成したこの二人の古典的理論家のオリエンタリズム社会認識における似たような偏見と錯誤を暴き出した。著者によると、社会科学は、東洋社会研究に存在する問題性から出発し、これらの創始者の理論を考

⁽¹⁾ 著者はここで「折衷主義」(eclecticism) という用語を使ったが、評者は文脈に基づき、ウェーバーの資料に対する意図的な利用を指摘していると判断するので、その代わりに「意図的な資料選択」としてまとめた。

⁽²⁾ もともとの表現は「時代的差異と錯誤」(chronological discrepancy and anachronism) である。

え直す必要がある。つまり彼は、社会学研究の古典時代から存在してきた西洋中心主義の問題をはっきり反省し、それを排除しなければならないと強調した。

5 議論と評価

本書の最大の特徴は、簡潔な分量で、近代社会科学の二つの思想の源泉に対して並行した批判を行ったことにある。マルクスとウェーバーは両者ともにオリエントを「自分を認識するための鏡」として捉えるので、彼らの西洋社会に対する理解は、たとえ表面上ではどれだけ対決しあうものであっても、実際にはそれらはひそかに共通的な「他者」へのまなごしに基づいて成立したものである。しかし彼らの参照物である東洋に対する認識自体が構築されたものであるゆえ、それに支えられた西洋社会に対する理解にも問題が潜んでいるかもしれない。この問題は本書ではっきり表明されていないが、社会学古典理論全体に対する野心的な批判へ発展する可能性がある。

ところがこの有意義な研究に対して、いくつかの問題について検討する余地がある。

まず、論点を強調するためだろうか、著者の分析にはマルクスとウェーバーの東洋社会論の複雑性をおろそかにする傾向がみられるので、彼の評価の公正さが疑わしいようにみえる。例えば、マルクスは彼の植民政策に関する大多数の評論では、インドに同情し、イギリスの植民侵略を批判するような立場に立っていた。一方で、ウェーバーは果たして本当に「疑われた近代化プロジェクトを救う」ために研究を行っていたかということもやや疑問である。例えば、S. コールバーグのウェーバーの「合理性」に関する類型学的な研究によると、ウェーバーは一種の方法論を持つ生活様式である「実質合理性」を重視し、それによって近代社会の代表的な道具的合理性と対決しようと主張した (Kalberg 1980: 1169-77)。もしコールバーグの結論が正しいなら、ウェーバーの研究目標は近代社会を弁護しようとするのではなく、諸文明の歴史の中でそれを制御できる文化を探し出すことである。

また、著者は特にウェーバーとマルクスの共通点を強調したため、二人の東洋社会研究に実際に存在した差異をきちんと提示していない。まず、マルクスのアジア社会に対する概説的な議論は、ウェーバーの比較歴史社会学の研究内容とは同一視できない。また、ウェーバーにとって、「オリエント」や「アジア」という枠組みよりも、中国、インド、イスラム等の文明という枠組みが分析においてより重要な単位である。確かに、理念型はその経験的指示対象との間の関係の適切性を疑いうる概念だが、西洋と非西洋に対して異なる扱いを行うための装置ではなく、普遍的で、両方に応用可能なものである。例えば本

書では、ウェーバーは「合理性」という理念型によって西洋社会の特殊性を表したと指摘したが、実際中国、インドなどで合理的な文化や制度が存在したことはウェーバーも認めた。こうした普遍的な方法論原則は、ヨーロッパ中心主義を超える一般社会学研究への道を切り開く試みでもあるだろう。

さらに、本研究で行われたマルクスとウェーバーの東洋研究のまとめの部分において問題であるのは、著者がそれらに関してどこまでが事実と一致する分析であり、どこからが問題だらけの構築であるとみなしているのか、明確にわからないことである。これもまたサイードの『オリエンタリズム』以来のポストコロニアリズム研究でよくみられる問題である。これらの研究はあまりにもテキスト・言説に対する分析にこだわりすぎて、それらが事実と不一致であると判断する基準がどのようなものであるかについて明確に説明しないため、オリエンタリズム研究の恣意性の限界をはっきり判断できない。マルクスとウェーバーの東洋社会論において、明らかに事実とは不一致の内容があることは誰にとっても認められることであるが、その一部はある非西洋文明の状況を反映したのではないか。例えば「停滞性」という用語は前近代の中国、特にその総体的な政治制度の特徴をある程度捉えたとは言えるだろう。だが、1980年代以降、前近代の中国社会の「停滞性」のもう一つの言葉である「超安定構造」は中国の学者の間で重要なテーマの一つであり続けている。もしもポストコロニアリズムのオリエンタリズム批判もこの問題を解決できなければ、その批判が単に各文化間の相互理解の努力を阻害する役割を演じてしまい、さらには狭隘なナショナリズム的な言説と区別できなくなる危険性がある。

とはいえ、本書はやはり評価できるところがある。著者はトルコ、インドなどで行われたマルクスとウェーバーの古典理論に関する先行研究を本書で紹介した（例えば、pp.30-1, pp.82-3など）。これらの論考、そして本書自体は現代トルコのマルクス／ウェーバーの読み方を示している、興味深い受容史の資料文献である。また日本では、本書のようにマルクスとウェーバーという対立した知的系譜に属する思想家を同時に批判するような研究は、評者の知る限り非常に少ない。日本では戦前から戦後に至るまでマルクスとウェーバーの接近の試みに熱中したが、両者の思想がともにもつ西洋中心主義的な要素にあまりにも無警戒的であったのではないかと、本書を読めば気づくことになるはずだ。

参考文献

- Kalberg, Stephen, 1980, "Max Weber's Types of Rationality: Cornerstones for the Analysis of Rationalization Process in History," *The American Journal of Sociology*, 85 (5): 1145-79.
 Turner, Bryan S., 1974, *Weber and Islam: A Critical Study*, London; Boston: Routledge & Kegan Paul. (= 1994, 香西純一・樋口辰雄・筑紫建彦訳『ウェーバーとイスラーム』第三書館.)

——, 1978, *Marx and the End of Orientalism*, Boston: Allen & Unwin. (= 1983, 樋口辰雄訳『イスラム社会学とマルキシズム——オリエンタリズムの終焉』第三書館.)

(きち しんか・博士後期課程)